

## アダム・スミスと近代經濟學

高橋泰藏

### 一 三浦先生のアダム・スミス論と現代の問題

明治の初、中期における經濟政策論としてのヨーロッパ經濟學の輸入時代、明治末期から大正初期へかけての翻譯的知識としての輸入時代を経て、經濟學が直に學問として、即ちそれぞれに「方法」をもつたものとして理解せられたのは大正末期から以後のことであり、それを若い世代に教えられたのは福田、三浦、左右田の諸先生であつた。この場合特に經濟學最大の古典たるアダム・スミス『國富論』について劃期的解釋——それは恐らくわが國においてのみでなく、世界的なそれとして——を試みられたのは三浦先生の「英國啓蒙時代の歴史的地位」(商學研究第三卷第一號アダム・スミス生誕二百年記念論集、大正十二年六月)と「アダム・スミスの體系なき體系」(同第三卷第二號大正十二年十二月)であり、それはわれわれ若い世代にとつての、單にアダム・スミス解釋についてのみでなく、經濟學一般の研究についての導きの星であつた。というのは、そこに表われた先生のアダム・スミス解釋は、より廣い視野からするヨーロッパ文化、思考方法の型についての先生独自の見方によるものであり、アダム・スミスを以て英國的思考方法——それは古代におけるギリシヤ的思考方法とローマ的思想方法との對照における後者の近世的代表としての——

の典型としての解釋の仕方を示されたものであつたからである。そこで先生がアダム・スミスについて下された解釋は、それが實證主義的客觀主義的方法による個別主義的名目論的社會觀に立つものであり、經濟現象を個々人の活動の結果として現われる個々の事象の間における規則性——これを當時先生は「秩序」(Regelmässigkeit, Gesetz-mässigkeit)という言葉で表わされたが、それはスミスが用いたOrderという言葉を念頭におかれたものらしく、後にはしばしばかゝる獨乙語とともに「規則性」とか「法則性」とかいう言葉を使われた——の集まりに外ならぬと見たものといふことであつた。そこから先生はまた、スミスを始祖とする交換價值論的理論經濟學をしばしば「自然科学的」であるとせられ、獨乙經濟學の「文化科學的」であるのと對比せられたのであつた。先生のこのスミス解釋は、英國啓蒙時代の新たな實證主義的精神という背景からするものであり、この新たな精神と思考方法との、經濟學という新たな學問領域における具體的な現われをスミスに見出そうとせられたものであつて、そこには先生の巨大な文化史觀的構想と、人間の思考法への薄氣味悪いまでに透徹した洞察力と解剖の仕方とが看取せられる。

このような先生のアダム・スミス解釋は、今もなおわれわれのスミス解釋にとつての導きの星であることに變りはなく、それを脱却することには甚だしい困難を感じるわけであるが、しかしそれはわれわれが先生のこの解釋に何等の疑問をもたぬことを意味するものではない。或は尠くとも、それでスミスの全てが説明しつくされるであらうかといふことである。このことは先生の『國富論』解釋が、第一篇におけ交換價值の理論——交換社會の機構の分析に重點がおかれて、第二篇の資本の構成、蓄積の理論が輕視せられていること、關連する。『國富論』における第一篇と第二篇との連絡、特にその方法的相異についてはしばしば指摘せられて來たところであり、この點については第二

篇がスミスの渡佛によつて重農學派特にケネーの「經濟表」の影響を受けてあとから繼ぎ足されたものであつて、『國富論』の構成としてはむしろ異分子的、附加的なものとする解釋が支配的であつたことは周知の如くである。先生の解釋が必ずしもこれと同じ根據によるものでないことは明らかであり、また第二篇の資本論についても、或は資本蓄積現象における規則性の分析が中心となつてゐると解され、或はスミスがそこにも貨幣を第一篇におけるとは異なる機能において捉え、資本の構成を問題としたりすることについては、彼のしばしば用いる必要に應じて必要な觀點から説くという方法がとられているからであり、ここにも先生のスミスについて言われる「體系なき體系」の表われが見られると解されたのであつた。一方このような先生の大きな視野からする解釋に教えられ深く影響を受けながら、われわれの或る者はスミスを別の形で解釋することを試み始めたのであつた。それはスミス經濟學を價値の理論としてではなくしに、或は生産力の理論として、或は國富乃至國民所得——スミスのいわゆる「年生産」——の増進の理論として解しようとするものであつて、勢ひ從來の解釋とは異なつて、第二篇に尠くとも相當の重要さをおき、むしろ第二篇よりふりかへつて第一篇を理解せんとするものに外ならない。(スミスの體系を生産力の體系として理解し直ほそうとしたものとして、高島善哉教授の『經濟社會學の根本問題』があり、拙著『國民所得の基本問題』は、スミス體系における「年生産」の概念と資本構成論とに重點をおく解釋を一つの手懸りとしたものであつた。)

以上のようなスミス解釋には、尠くとも自分にとつては二つの理由乃至動機が考えられる。一つはスミスが『國富論』冒頭の「緒言と研究の計畫」において「國民の富——生活の豊かさの具體的負擔者を年生産に見出し、その増進の二大要因を分業と資本蓄積に見ていること、いいかえれば『國富論』の究極の課題が富の増進としての發展現象の

解明におかれていることから、第二篇の資本蓄積論は從來の解釋とは異なつてより重視せらるべきものであり、從つて第一篇の交換社會の機構の分析は、この觀點から年生産が富の増進のために資本として、或は生産力として結合せられる機構としての市場機構の分析として理解せられるということである。その二は、われわれがこのような解釋を試みる事が、假りに十八世紀後半におけるスミス解釋としては必ずしも妥當ではないとしても、尠くとも現代における經濟學の在り方へのわれわれの要請を反映するものであり、この要請に應える經濟學への手懸りをスミスに求めようとする意識の働いていることである。この場合その手懸りを他のものではなく特にスミスに求めようとする理由は、第一の點たるスミスにおいて國富の増進ということがその究極の課題となり、これに應ずる如く第二篇に資本蓄積論がもたれていたにもかゝらず、この問題意識と理論構造とが、スミスを承け繼いでいゆる理論經濟學を完成したといわれるリカアドには缺け、それが最近までの經濟學の在り方を規定するとともに、この觀點からは經濟學は常にその準備的段階に止どまつて發展現象の解明という究極の課題に迫まりえないで終つてゐる、という反省である。

幸い、先生を中心とする金融經濟研究會——それは昭和十四年に先生が日本銀行顧問に就任せられたのを機會につくられた、先生を指導者とする、われわれの當時用いた表現によれば大人のゼミナルであつた——の末席につらなりました自分は、以上のような理由と動機とからするスミス解釋に關する疑問について、機會ある毎に御教示を乞うことが出來たのであつた。例えば上に述べた「緒言と研究の計畫」を手懸りとする『國富論』の意圖と構造とに關する疑問の如きはそれであつたが、先生はこの場合にも、この「緒言」はスミスが『國富論』を書き終えてから出來るだ

け筋の通るようにあとから書いたものであり、それを重視するのは危険だというように教えられたことを今に記憶する。これらの先生の御教示にもかかわらず、上述のような自分のスミス解釋、或はより正確には自分がスミスから求めようとしたものは、依然として捨てえなかつたのであつたが、しかし同時にその反面で、このようなスミス解釋にも問題を感じなかつたわけではなかつた。それは後に述べる如き、そして本稿への動機となるような、『國富論』の構成における第一篇から第二篇へという順序のもつ論理的な困難という問題であつた。こゝに三浦先生への追慕の心を以てアダム・スミスと近代經濟學という問題をとりあげる理由は、最近の經濟學のあるものが一方この『國富論』構成における困難の解決に何等かの暗示を與えるものがあると思われると同時に、これら最近の經濟學の構成方法の中に、「スミスへの復歸」の動向——それは恐らく無意識的なものではあるが——を看取しうるものがあると思われ

るからである。スミスを以上の如く解し、更にスミスと近代經濟學とを結びつけて、後者に前者への復歸の方向を見ようとするには、或は解釋としては妥當でないものがあるかも知れない。殊にこの後者の點については先生御在世ならば手痛い御批評を受けるであろうことも想像に難くない。しかしわれわれにとつては解釋そのものに問題があるのではなくして、現代の、そして將來の經濟學が如何にあるべきかにならなないのであつて、この場合におけるスミス解釋の問題は、それを通してわれわれ自身のもつ問題を解決することであり、それへの示唆をうるために外ならない。強いて言えば、スミスが何う考えていようと問題ではないとも言いえよう。先生もしばしば、時代によつて読み方は違うのだということを教えられたのであつた。解釋論をうるさく持ちかければ、恐らく先生も最後にはそういういい方をされ、お前は一體何う考えるのだと叱られつゝも、このいわば自分勝手な解釋にも一應はお耳を

かして下さるのではないかと考ふる。本稿はそういう意味での一つの報告の氣持で書いたものに外ならない。

二 『國富論』の構造とケインズにおける價值論喪失の問題

『國富論』全體の、或はその究極の課題を、國富の増進としての動態過程、いわば發展現象の解明にあると解釋する場合に、『國富論』の構造について新たに起る問題は、第一篇と第二篇との順序の問題である。それは第一篇においては經濟世界が分子論的世界として、即ち個々の財の交換の「關係」として捉えられており、その後第二篇においてこれらの個々の財の總計として「總年生産」なるものが考えられ、それは更めて別個の觀點と方法とによつて、或は資本と收入とに、或は固定資本と流動資本とに、構造的に分解し把握せられていることに基づくものである。この第一篇と第二篇とにおける全體の分析方法の相異は、既にしばしば指摘せられ明らかにせられているところであるが、この異なる方法が如何にしてミスにおいて結合せられるかに問題がなくてはならない。經濟世界が「交換價值」的世界として、即ち個々の分子相互の交換「關係」として把握せられるということは、それを構成する分子が均質的なものとして、より具體的にいえば「生産費」という同じ構造原理によるものとして把握せられることによつて、或はこれを別の觀點からすれば「自利の追求」という同じ行為原理によつて支えられる個々の人の集合として交換社會が理解せられることによつて、そこに一つのメカニズム（機械的裝置）を想定するものであり、このメカニズムにおける「秩序」或は「規則性」の發見とその根據の解明とを可能ならしめるものであつた。このような分子論的世界のもつ特徴は、それが關係的世界たることであり、それ故にそこにおける價值形態は「交換價值」として

のそれであつたのであつて、第一篇において先ずかゝる交換價值的、關係的世界が描かれ、しかる後に第二篇において「年生産」なる總計的實體的なるもの——それは第一篇におけるとは異なる觀點から前述の如き「構造」として分解せられる如き實體的全體に外ならない——が觀念せられることには、論理的に甚だしい困難があるといわねばならない。「國富論」の構成について第一篇を主とし、第二篇を異分子的附加物として排除し去る立場をとればともかく、むしろ第二篇の内容を以てその究極の或は本來の課題の所在とする解釋にとつては、この點は極めて重要な問題といわねばならぬものであり、そこにこの解釋の苦惱があり、またこの立場からすれば、この苦惱は實はこの解釋のもつ苦惱ではなくして本來スミス自身のもつべき苦惱であつたはずのものである。

この點に關する自分の一應の解釋は次の如きものであつた。即ち以上の如き『國富論』の構成上における困難、即ち第一篇から第二篇へという順序のもつ困難は、しかし本來形式的、論理的なものであつて、その實質的な解決——第一篇から第二篇への架橋は、スミス自身においては、「生産費」を媒介とすることによつて行われていたといふことである。ただし、第一篇における交換價値概念は、たしかに相對的關係的なものではあつたが、しかしそれはリカードの「投下労働量」の比によつて説明せられる如き徹底した相對主義によるものではなく、やがて「進化する社會」において「生産費」によつて説明せられる如く、一面相對價値——交換價値の根據をなすものであると同時に、その構成要素を以て充たされ、それらに分解しつくされる如きものであつたのであつて、この個々の財價値の構成原理は、スミスにとつては、社會の所得としての勞賃、資本利潤及び地代、並に資本の補填部分（スミスのいわゆる第四部分）として、「年生産」の構成、分解の原理となるものであつたからである。

恐らくこのような經濟世界の構造原理に關するスミスの根本的見方が、スミスをして上述のような形式的論理的な困難を感じしめることなく、第一篇から第二篇へという『國富論』の構成方法について何等の疑も感ぜしめなかつたのであらうと想像せられる。リカアドが、『國富論』の構造におけるこの困難を意識的に感じていたとはいひ難いが、しかしリカアドの徹底した相對主義は、『國富論』第一篇の内容に當るものをその『原理』の中から排除しつくす方法をとらしめ、それによつて純粹に交換價值中心の理論經濟學の體系を完成せしめたと見ることが出来るであらう。

しかしわれわれにとつての問題は、スミスによる以上の如き實質的な解決を、更に形式的にも可能ならしめる方法如何の問題でなくてはならない。この場合われわれにとつて一つの手懸りとなり暗示となるものは、最近における理論經濟學の敘述の方法であると思われる。それは後述の如く「國民所得」を先ず經濟の實體的な全體を代表するものとして提示し、それによつて代表せられる經濟の規模と構造との「解剖」を行つて、しかる後にそれが現實に運行せられる機構としての交換、價值等の現象を經濟の「生理」として取扱わうとする方法である。たゞこの場合、これら最近の經濟學——それはいわゆる「古典的」經濟學への反省に出發するところの——の基礎をなしたと見られるケインズ經濟學のこの點に關してもつ地位が顧みられるであつて、それはケインズ經濟學における「價值論の喪失」という問題である。

經濟學の發展におけるケインズ經濟學の意義の評価と位置づけについてはなお必ずしも十分に明らかにせられてゐるとはいひ難いけれども、そこにおける價值論の喪失ということは尠くともそれへの批判として重要でなくてはならぬと思われる。しかしこのことは同時に、經濟學の傳統的方法としての價值論という觀點から見たものであつて、果

してそれが單なる傳統の喪失に終るものであるかには問題がなくてはならぬと思われる。いかえれば價值論のこの喪失の中に、たとえそれが無意識的なものであるにしても、新たな意味が見出されぬであろうかということである。

ケインズの『一般理論』が、彼のいわゆる「古典的」理論への反省と批判とに出發するものであることは彼自身の明らかにしているところであり、それはより具體的には或は古典的均衡概念に對する彼の均衡概念の中に、或は古典的雇傭理論に對する彼の雇傭理論の中に見出されるであろう。しかしこの一見ケインズによつて突如として行われたかに見える「革命」は、必ずしもしかく飛躍的に行われたものではなく、また必ずしもしかく「革命」的でないものがあることが注意せられねばならぬと思われる。この意味で最も重要視せられねばならぬものが、いわゆる價值論の喪失であろう。

均衡概念、雇傭概念における改訂はしばらく別として、ケインズによつて礎石がおかれ、その頂點に達した近代理論への胎動は、既にウィクセルに見出されるものであつて、それが或は直接にはストックホルム學派を生み、或はケインズ、ハイエクの登場への大きな刺戟となつたことは周知の如くである。この場合、これら近代理論に共通に見られる重要な特徴は、その中心が價值論から資本理論に移りつゝあることであろう。(この意味からはこの動向の根源は更にポエーム、ウィザアに溯るともいふべきであろう。) このことの重要な意味は、價值中心たるによつて、より一般的に經濟主體の行動の客觀化を價值的の世界に見出すことから、資本中心たることによつて、經濟活動の中心を企業に認め、それによつて經濟動態現象を一層活き活きと描寫することにあつたといふのであろう。しかし同時にここで注目せらるべきことは、そこにおける資本理論が、資本利子論としてのそれであり、資本構成論としてのそれ

はないことであろう。いいかえれば、この新たな中心概念たる資本利子概念を通して、再び經濟現象が一つのメカニズムとして捉えられているのであつて、かつての價值體系としての均衡に代わつて、資本利子體系としての均衡がメカニズムの基礎となつていゝといふ。このことは資本理論——資本利子論が價值理論に代わつて經濟理論の中心として登場しえた理由であると同時に、またこの限りにおいては經濟理論がメカニズムの理論であり、このメカニズムにおける法則性乃至規則性の理論であることにおいては、必ずしも大なる飛躍を遂げていないことを示すものといふであらう。ケインズ理論が、或はより一般的に近代理論が、「古典」理論に對するプロテスタントであるとしても、それは要するに舊教に對する新教たるにとどまることの一つの側面もそこにあると見られるであらう。

價值論喪失の意味が以上の意味にとどまる限りにおいては、それは必ずしも眞の喪失を意味するものでもなく、いわゆる喪失の意味もこの意味にとどまるものでないことも明らかであり、またケインズにおいてはたしかに價值論喪失といわゆるべきものゝあることも否定しえないところである。しかし問題は、ケインズにおけるこの價值論喪失が單なる喪失という消極的なものとどまるものであるかということにならぬ。

ケインズにおいても必ずしも價值概念がないのではないことは『貨幣論』における「支配労働」價值論的考え方を背景とする貨幣價值概念に見ることが出来るし（この點については拙著『經濟發展と雇傭問題』第三マルサスの富の理論の三）富と「支配労働」概念の項参照）、また『一般理論』におけるその變形を「労働單位」の概念に見ることが出来るが、しかしこゝでより重要なことは、これらの概念を通して、ケインズが「社會の所得」、「產出量」、「雇傭量」、「投資量」等の「總體概念」を導き出していることである。即ち一方で從來と同様にメカニズムの法則を求めながら、し

かも他方で巨視的な観点からそれを利用しつゝ、總體的な量の變動を規定する關係を求めていることである。そこにいわゆる微視的分析から巨視的分析への方法的な轉換が見られるわけであるが、この方法的轉換のより内容的な意味は、それによつて交換體系の原理としての價值論を喪失すると同時に、新たに總體的な把握による經濟の水準乃至規模の把握という問題を提起していることである。この前者に着目するときはいわゆる價值論の喪失のみがクローズ・アップされるわけであるが、しかしその反面において積極的に總體的把握という新たな問題の提出されていることが注目されねばならない。ケインズがこのように總體概念を新たな方法的概念として重要視していることの一つの大きな理由は、従來の價值體系的な經濟世界の把握を以てしては、その時々における具體的な經濟の在り方、特に經濟水準を捉ええないということに基づくものであつて、これを當時の歴史的現實的な問題の在り方に照らしてその具體的な顯現乃至指標として見たものが「雇傭水準」であり、「投資」、「貯蓄」、「消費支出」、「乗數」等の諸概念は、このような意味をもつ雇傭水準の變動を説明するための理論的裝置であり、『一般理論』はこれらの理論的裝置の綜合として構成せられものと見ることが出来るであらう。

『一般理論』が直接に對象としたものが、雇傭水準であつたことは、以上のような問題意識によるものであり、それを方法的に基礎づけるものが總體概念であり、巨視的分析であつたわけであるが、これをより一般的に見れば、經濟のそれぞれの時における在り方を經濟水準として捉えることにあつたのであつて、それはより理論的には「投資」、「貯蓄」、「消費支出」、「雇傭量」の間における貨幣の循環を媒介し、經濟の水準と規模との一般的代表者であり負擔者であるところの「所得」に外ならぬといふべきである。そこにはケインズ自身が自ら「リカアドの徒」ではなくし

て「マルサスの徒」であるとしたのとは異なる意味にはあるが、しかし共通した人間の立場からの經濟の實體的把握——それは主體を除いた客觀的な關係としての價值體系としての把握とは異なるところの——への要求が親われ、更にこのマルサスを媒介として、スミスの「年生産」の概念を中心とする、尠くともそれを經濟の實體と見る觀方との共通點を見出すことが出来ると思われる。このようにしてケインズにおける價值論の喪失は單なる喪失ではなくして、別の新たな觀點への用意を含むものと見ることが出来ると思われるが、それはなお『國富論』の提出した、或は尠くともそこにわれわれが讀みとるべき問題を解決したものでなかつたのであつて、そこにケインズを新たな出發點とする近代理論に課せられた問題があつたといふべきである。この問題は近代理論が必ずしも意識的に問題としたものではなかつたし、特にそれらがスミスへの復歸を意識的に意圖しているといへないことはいうまでもないが、ケインズによるこの轉換が、問題のこの方向への展開を無意識的に、しかし必然的ならしめていたともいえるのであつて、このような觀點から近代的理論の新たな體系と構造とを暗示するものとして、最近における二つの著述を顧みることが出来ると思われる。

### 三 近代理論の新たな體系の問題

ケインズを轉期とする近代理論は、その巨視的分析の方向に向つて急速に展開せられ始め、部分的には著しい精密化を遂げつゝあるといふが、しかし新たな經濟學全體としての體系についてはなお十分な反省が行われ、構想が示されているとはいへないものがあつた。しかるに最近に至つてその全體としての構想、體系を略ぼ窺いうるもの

に接することが出来るに至つたと思われるのであつて、われわれはその例として J. R. Hicks & A. G. Hart, *The Social Framework of the American Economy, an Introduction to Economics*, 1945. 及び P. A. Samuelson, *Economics, An Introductory Analysis*, 1948. とを挙げようであらう。この二つの著述は、ともにその副題の示すように経済學への「序説」であつて、前者は新たな経済學への入門書の意味を以て書かれたものであり、後者は教科書として書かれたものであつて、その理論的水準においては必ずしも高いとはいえないものであるが、しかしこれらの書物が入門書乃至教科書的人格のものであるだけに、またそれ故にイギリスとアメリカとにおける新たな経済學の代表者達のもつ新たな體系的構想を窺いうる點で重要な意味をもつと思われるものである。というのは、これらの著者達は共通に、その入門書乃至教科書の意味を、初學者——經濟學を一年しか修めないような人々（ヒックス）や、一—二ゼメスタア以上を修めようとしていない人々（サミュエルソン）——にとつて、これまでの傳統的な、理解に困難な限界分析や價值理論から出發する方法に代わる最も入り易い方法という、いわば便宜な方法にあるとしているのであるが、この理解し易い方法、敘述の順序ということの中に、實は對象の把握と記述とに關する根本問題——思考方法における重要な反省と轉換という重要な問題が含まれていることが看取せられねばならぬと思われるからであり、この意味においては、これらの著述には、その内容の難易は別として、單に入門書の域にとゞまらぬ問題が含まれているといわねばならぬからである。

發表の年代順からいつて先ずとりあげられねばならぬものはヒックス、ハートの『アメリカ經濟の社會的構成』（一九四五年）であるが、その基本構想は既にヒックスの『經濟の社會的構成』（一九四二年）に現われたものであつて、

本書はハートの協力によつて新たにアメリカにおける事實を補充したものに外ならない。(こゝで問題となるのは、ヒックスの前者 *Value and Capital, An Inquiry into Some Fundamental Principles of Economic Theories*, 1939, 2nd. revised ed. 1946. との関係である。本書はソルラスの一般均衡理論を基礎とし、これにオーストリア學派、北歐學派、ケムブリッジ學派等の近代理論をとり入れた、大體ケインズの『一般理論』と同じ内容をもつものであつて、理論經濟學の最高水準を示すものといわれているものであり、それだけに同じ著者による本書と『社會的構成』との理論的、體系的關係は問題となるものであるが、從來の方法を代表する『價值と資本』は、著者が後者の最後にも述べているような、經濟の「生理學」であり、『社會的構成』はその「解剖學」に當ると見ることが出来るであらうし、また後に述べるようなサミュエルソンの構成方法によれば、敘述の順序乃至體系としては、前者は後者の後に位置づけられるものと見ることが出来るであらう。)

ヒックスは、本書を經濟學の序説乃至入門書として書いた理由として、經濟學の基礎的研究のために、それを正しい方法で構成する特殊の見解をもつに至つたからであるとしている。その意味は、經濟學の研究を如何に始めるかの問題は、最近まで一つのディレンマに陥つていた。即ち需要供給の「理論」、即ち價值論から始めるか、産業及び労働の實際問題に關する「記述」から始めるかという問題である。この何れについても著しい缺陷があるのであつて、それは前者の方法によるときは、初學者には具體的觀念をうることに困難であり、後者の方法によるときは、單なる事實の集合が、實際政策の討議宣傳に終つて、それらを整理し理解する十分な理論的基礎をうるものが出来ないからである。このような理由から、一面直接にいわゆる理論的研究に入ることの困難さを避けると同時に、他方現實の經

濟現象についての具體的觀念をえつゝ、しかもやがて理論に入りうるための基礎として、新たに「ソシアル・アッカウンティング」(社會的會計)なる概念による經濟の總體的記述を試みようとしたものが本書であつたわけである。本書の中心をなしている「ソシアル・アッカウンティング」の概念の詳細については別の論究を俟たなくてはならぬが、その根本をなすものは、從來の經濟理論におけるように、經濟現象を個々の財の交換、需給現象と見、これを個個の經濟主體の行爲原理から説明する理論ではなしに、經濟の運行の總體的な、即ち生産行程、生産要素(資本と勞働)、社會的生産物(Social Output)としての把握を基本とするものであつて、従つてその中心は「國民所得」の構造とそれを規定する關係の分析にあることとなり、その概念的的方法的手段として新たに提案せられているものが「ソシアル・アッカウンティング」に外ならない。たゞこの場合從來の巨視的把握方法たる再生産理論と異なるところは、單にそれが生産乃至生産物としての物的側面のみを見るものではなくして、「國民所得」のもつ他の側面たる貨幣的把握をも併せ行おうとしていることであり、またケインズの如く貨幣的側面からの把握のみに偏してないことであつて、そこに新たな巨視的把握の方法と、「國民所得」中心的な方法との意味があり、それが特に「ソシアル・アッカウンティング」と稱する理由が考えられる。

以上の如き國民所得乃至「ソシアル・アッカウンティング」を中心とする經濟の巨視的把握のもつ理論的意味(彼はそれもまた一つの理論の仕方であると考へている)を、ヒックスはそれが經濟の「解剖學」たることにあるとしている。即ち彼はその結論において、從來の價值論を中心とする理論と本書に試みられものとの關係について、前者を經濟の「生理學」であり、後者を「解剖學」であるとしているのであるが、その意味は前者たる價值概念を中心とす

る經濟のメカニズムの分析が、經濟機構の機能 *function* する仕方の分析であるに對して、後者が解剖によつて見出される身體の構造であり、諸器關の設計圖の記述であるということである。このことは、彼自身が本書を以て初學者のための入門書であり、經濟學研究のための便宜上の順序の問題としてゐるにもかゝらず、單にそれが手引き乃至便宜の問題にとゞまらず、經濟現象の把握にとつて欠きえない重要な方法の問題であることを示しているということが出来るであろう。たゞヒックスにとつて、解剖學を先きにし、生理學を後にすることが便宜の問題として考えられたのは、それらがこの比論から單に方法的に併列するものとして考えられたことによるものであつて、そこにはこの新たな方法と理論領域の提案以外には、何等論理的な必然の要求はなかつたというべきであり、かつてわれわれが『國富論』の構造について感じた論理的問題の解決に通ずるような思考方法上の轉換は必ずしも意識的であるとはいへない。この點についてはむしろサミュエルソンの『經濟學』のもつ構成により暗示的なものがあると思われる。

サミュエルソンの『經濟學』（一九四八年）もまた「序説的分析」という副題をもつものであることは既に述べた如くであり、特にその全體の内容から見て教科書たることを目的としていることは明らかであつて、このことは二十世紀半ばにおけるアメリカの經濟機構、經濟問題の解明を目的としたことが「序文」に記されていることから知られるところである。（例えば第一篇第六章企業組織の章の附録として會計學の要綱を述べて貸借對照表の説明をしており、第二篇に國民所得の決定及び變動を述べるに當つて、二章に互つて銀行組織と連邦準備制度並に中央銀行の通貨政策等の實際について詳細な説明を行つている點等は、從來の「經濟原論」書乃至「經濟通論」書と相當に趣を異にする點であると同時に、極めて廣範圍に互る「經濟通論」教科書であり、特に一般的教養としての經濟知識を具體的



を中心としたことは、ミスがかゝる生活の豊かさの實體であり具體的な負擔者としての「年生産」を對象とすることを先ず明らかにし、その増進を第二篇資本蓄積論において取扱つたのと、その構想と内容とを同じくするものを用いるからである。

ところでこゝでの問題は、以上のような「國民所得」を中心とし、尠くとも出發點とする本書の構成のもつ意味である。本書は三つの部分から成り、第一篇は機構的實體としての種々なる要素、制度（資本主義的經營組織、企業組織、勞働組織、政府の經濟的役割等）の解明を通して、量的實體としての「國民所得」を浮び上らせることを主題とし、第二篇は「國民所得」の決定と變動とを、貯蓄、投資、乗數理論等の近代理論の援用と、通貨金融組織、財政々策等の作用の分析によつて説明することを主題とするものであつて、以上二篇は略ぼヒックスの『社會的構成』の内容に當るものであり、従つて國民所得を中心とする經濟の實體的規模を描いたものであるが、續く第三篇において「國民的生産の組合せと價格付け」Composition and Pricing of National Output の標題の下に、生産物の價格決定、分配、流通の法則を取扱つてゐる。（この第三篇の内容に當る靜態的均衡をより高い理論的水準において取扱つたものが、同じ著者の *Foundations of Economic Analysis*, 1948. である）と見ることが出来る。）この構成方法は、先ず「國民所得」という形において經濟の實體的規模を提示してゐること、しかる後にかゝる實體の提示を承けて「國民生産物」の組合せと價格付けという形において、從來の經濟理論の對象たる流通の理論を取扱つてゐる點で、經濟學の體系或は思考方法について問題を提出するものであり、既に述べた『國富論』の構成上における論理的問題の解決への手懸りを暗示している意味で重要であると思われる。

ヒックスが經濟構造の分析を「解剖學」に、運行のメカニズムの分析を「生理學」に比したことは一つの解決方法であるといふが、同時にこの二つの分析の仕方を併列的なものと見ることを意味することは既に述べた如くであり、それは對象の取扱い方の先後を問題とせぬ考え方であるといふ。これに對してサミュエルソンが、先ず實體としての全體の規模と構造（並に組織）とを提示し、しかる後にこの實體が現實に運行するメカニズムの法則を明らかにするという方法をとつてゐることが、サミュエルソン自身において一應便宜の問題と考えられてゐることは既に述べた如くであるが、しかしそれは單に便宜の問題にとゞまらぬ論理的な問題を含んでゐると思われ。われわれがスミスの『國富論』の構成方法について感じた論理的困難は、それが先ず交換社會という形において個々の分子の關係を描き、しかる後にその總計としての「年生産」——それはヒックス、サミュエルソン等における「國民所得」に當るものである——を取り上げ、その規模と構造を論ずるといふ敘述の順序に關するものであつた。この論理的困難さが、スミスにおいては個々の分子の構造原理たる「生産費」を全體の構造原理とすることによつて實質的には解決せられていたことも既に述べた如くであるが、しかし論理的困難は困難としてやはり残されたといわねばならぬものであつた。このスミスの敘述の順序を逆にしたもののがまさにサミュエルソンの方法だつたのであつて、そこには先ず全體が一つの總計的な實體として捉えられ、しかる後にそれが個々の分子に分解せられ、これらの分子間の關係として流通世界が描かれ、この流通のメカニズムとして現實の運行機構——ヒックスのいわゆる經濟の「生理」が捉えられるという方法が見られる。この敘述の順序は思考の方法——論理を反映するものであり、經濟學がともかくもその

始めにもつた内容をより論理的な形において整理する一つの方法を示すものと見ることが出来るであろう。

この一見形式の問題に見える敘述の順序としての體系の問題は、しかし今一つの重要な問題を含んでいるといふ。それは既にスミスが實質的に提出したところの問題意識という問題であり、それはリカード以後においては失われたものであつた。スミスが實體の負擔者としてとりあげた「年生産」は、一面上述したような意味からは理論的な意味におけるものであつたが、同時に他面ではそこに生活の豊かさという問題を見ていたからであり、それ故に經濟學の究極の課題をかゝる「年生産」の増進の原因の解明においたのであつた。このスミスにおける「國富の經濟學」としての問題意識が、マルサスにおいては「貧困の經濟學」という形をとり、その後リカード經濟學の完全な支配という「不幸な」(ケインズ)一世紀を経てケインズにおける「完全雇傭の經濟學」となつて現われたといふ。ケインズのこの問題意識は、マルサスのそれのより具體的な形におけるものであつた(マルサスのそれが全體としての、いわば平均としての貧困であつたのに對して、ケインズのそれは貧困のより具體的在り方を失業に見たものであつた)と同時に、スミスのそれが國富の増進——經濟發展というより一般的問題としてであつたに對して、より現實的問題としてであつた。しかしこの時代的背景に基ずく相異の背後にある共通なもの全體としての經濟の規模乃至經濟生活の水準を捉え、そこに問題の所在を見ようとしたことであつた。「國民所得」を經濟の實體的規模の代表として見、そこから經濟學を出發せしめようとする上述の如き最近の傾向は、リカード以後の經濟學のつた無問題的客觀的なメカニズムの描寫への一つの反省の仕方を示すものといふるのであつて、そこには『國富論』的體系の形式的整理を通ずる内容的な復歸と同時に、經濟學の問題意識における復歸を見ることが出来ると思われる。勿論スミス

におけると現代におけるとの間には、資本主義の生成期と行詰り期とによる問題の切實感における相異があり、またヒックスとサミュエルソンとの間にも、問題構成の動機における相異が認められねばならぬであろうが、そこには問題意識による體系化という重要な共通點と、その新たな方向への萌芽を認めうるであろう。

